

## 2021年度 流域圏担い手づくり事例集について

'21.10.1 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

## 【これまでの事例集づくりについて】

持続可能な流域作りに関わる102団体に取材を行い、2013～2016年度にかけて4冊の「山村再生担い手作り事例集」を、2017～2018年度にかけて2冊の「流域圏担い手づくり事例集」を作成した。また、2017～19年度には1年に1回、事例集づくりでできた人のつながりを深め、広めることをめざして「事例集交流会」を開催した。

2019～20年度は事例集に関する作業を休止し、流域圏懇談会10年誌を作成。これまでの事例集づくりの成果を振り返るとともに、懇談会のキーパーソン19人に事例集形式で取材を行い、レポートにまとめ掲載した。

事例集のあゆみ

発行年度	タイトル	調査団体数	備考
2013 (H25) 年度	山村再生担い手づくり事例集	21 団体 (山:21)	
2014 (H26) 年度	山村再生担い手づくり事例集Ⅱ	21 団体 (山:17、川:2、海:2)	川・海の活動団体を取材先に加える
2015 (H27) 年度	山村再生担い手づくり事例集Ⅲ	22 団体 (山:18、川:2、海:2)	
2016 (H28) 年度	山村再生担い手づくり事例集 その後いかがお過ごしですか？ プロジェクト	17 団体 (山:17)	2013 年度の取材先を再取材
2017 (H29) 年度	流域圏担い手づくり事例集	19 団体 (山:12、川:6、海:1)	山村再生担い手づくり事例集交流会開催 (於・根羽村、2017.4.15) 冊子名を流域圏担い手づくり事例集に移行
2018 (H30) 年度	流域圏担い手づくり事例集Ⅱ	19 団体 (山:11、川:7、海:1)	流域圏担い手づくり事例集交流会 2018 開催 (於・佐久島、2018.4.14)
2019 (R1) 年度	(担い手づくり事例集のふりかえり)	—	流域圏担い手づくり事例集交流会 2019 開催 (於・岡崎市、2019.6.22)

## 【流域圏懇談会10年誌づくりで見えてきた事例集の今までとこれから】

## ・取材による発見と事例集のこれから（10年誌p97より転載）

取材を通じて大変多くの発見があった。たとえば高齢者が独創的かつパワフルな活動を展開している長野県根羽村、地域愛に裏付けられた活動が浸透している岐阜県恵那市、多数の若者がITターンし、町場の住民との交流も含め、きわめて多数の多様な活動が生まれている愛知県豊田市、長い林業の歴史に支えられている愛知県岡崎市といった地域特性である。また、取材対象が山村から流域圏に広がったことで、新しい発想や切り口で水辺空間を活用し、地域の活性化につなげる取組が紹介されるようになったことも注目に値する。

取材を受けた側が翌年取材者として事例集づくりに参加したり、流域圏懇談会のメンバーになったり、取材者と取材先が意気投合してコラボレーション企画が生まれたりといった、新しい交流も生まれた。当初は山部会の活動として発足した事例集づくりだったが、川と海の関係者が取材者と取材先の双方に増えていったことで、懇談会で課題となっている部会間の連携を進めることにもつながった。

この事例集づくりを通じ、持続可能な流域づくりに関わる団体がこれほど多く存在し、新たに誕生し続けていて、活動内容もきわめて多彩であることを発見できたのは大きな、嬉しい驚きだった。すべてのレポートから、地に足の付いた、身近な人々とつながる暮らしの中で得られる幸せを感じ取ることができる。ここに紹介された人々の活動は、きっとどこの流域でも応用することが可能な、たくさんの示唆にあふれている。

・取材先団体の設立年表から見てきた矢作川流域の市民活動の変化（21.2.19全体会議資料）

## 矢作川流域圏の環境保全活動史（第6章）

### ① 公害・矢水協時代（1970年代～）

矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）時代「流域は一つ、運命共同体」の提唱へ

- ・ 矢水協による上下流連携の推進と支援体制の確立
- ・ 流域下水道事業の展開



矢水協

### ② 近自然時代（1990年～）

近自然時代「川を市民に取り戻そう」（豊田市、矢作川漁協を中心として）

- ・ 河川法改正
- ・ 豊田市、漁協、研究所が主体となった取り組み
- ・ 矢作川水系の河川計画



古川水制工

### ③ 流域圏の転換期

- ・ 平成の大合併
- ・ 地域の新たな取り組み 特にめざましい女性たちの活躍
- ・ 森の健康診断、木の駅などによる新たな森づくりの展開
- ・ 若者たち、よそ者たちの流入・移住・活動開始



天下杉

### ④ 矢作川流域圏懇談会の時代へ（2010年～）

矢作川流域圏懇談会「山・川・海 流域一体で川づくり」

- ・ 矢作川水系河川事業等の動き
- ・ 新たな市民による水辺活用・再生の動き



新・矢作川筏下り

2010年以降の動き（10年誌p117より転載）

（近藤）2010年、流域圏懇談会という枠組みができた。これを立ち上げた中部地方整備局、豊橋河川事務所がどこまで認識されているのかわかりませんが、これは明らかに次の一つの時代のネットワークを形成する画期的なセンター機能を創りあげることになりました。

面白いのは、矢水協時代とか豊田時代と違って、運営主体となっている豊橋河川事務所はその性格上裏方に徹しており、運動としての主体的戦略を何も持っていないこと。この10年やってきたのは、あくまでもその構成となっている何十もの団体であったり、市民だったり、それが無理矢理、豊橋河川事務所を引っ掛けてここまで来た。それは悪いことではなくて、次の10年を考えると非常に重要なことだと思います。

前の二つの時代と違って流域圏全体を見ているということと、セクターの種類がめちゃくちゃ増えている。森林組合だったり、海の漁協だったり。「多様性」というのが、これから大きなキーワードになります。流域圏での課題がほとんど河川区域内では解決できないことばかりだというのが、懇談会設立の大きな動機であり、そのためにも多様なセクター、人材が必要。そのことが見えてきたのがこの10年であり、懇談会はその基盤を創ってきたのではないのでしょうか。

## 【2021年度の活動案】

流域圏担い手づくり事例集の作成を再開する。

10年誌づくりの過程で、流域の課題を解決するためには、もっと都市住民を巻き込むことが必要という認識が共有された。その先進事例を対象として取材を行い、レポートを作成する。

これまでと取材の形式を変え、調査対象のプロジェクトに関わる複数のメンバーに取材し、プロジェクトの全体像を立体的に浮かび上がらせることをめざす。

### 取材対象案

#### 1) 「森と子ども未来会議」

通常、プレハブで建てられる学童保育の建物を地域産木材で建築。

### 森林と都市の子どもの居場所がつながる



額田木の駅プロジェクトの土場（HPより）



名古屋市昭和区にある「山里学童クラブ」。愛知県の木材を活用して建築された学童保育所第1号（額田木の駅プロジェクトHPより）



名古屋市緑区にある「あおぞら学童保育クラブ」。額田の木材を活用して建築された（写真提供：唐澤晋平）



（10年誌p133より転載）

### 取材対象者案

鈴木建一さん（森と子ども未来会議）、東海林修さん（東海林建設設計事務所）、唐澤晋平さん（奏林舎）、学童保育を利用する児童の保護者（ほか）

## 2) 「都市の木質化プロジェクト」×「旭木の駅プロジェクト」

## 森林と都市のまちづくりがつながる

名古屋市の長者町と呼ばれる錦二丁目では、2011年からまちづくりの一環として「都市の木質化」に取り組んでいる。主体となっているのは、「錦二丁目まちづくり協議会」。名古屋大学の「都市の木質化プロジェクト」と連携し、行政、豊田森林組合や旭木の駅プロジェクト（豊田市旭地区）など木材供給者ともつながって、ウッドデッキを設置するなど街の木質化を進めている。

活動は、実際の木質化だけにとどまらず、年に一度の「長者町えびす祭り」では、薪割り体験や木を使ったワークショップを実施。協議会メンバーが旭地区に行って森の健康診断や山菜摘みツアーに参加するなど、木と親しみ、中山間地との交流を進めている。

2020年3月22日、長者町のストリートウッドデッキが更新され、3代目が完成！都市の環境で自然乾燥された2代目ウッドデッキは表面を削って生まれ変わり二次利用される（都市の木質化 project Facebook より）



協議会メンバーが参加して行われた「森の健康診断」  
（豊田市旭地区）

（10年誌p134より転載）

## 取材対象者案

名畑恵さん（錦二丁目エリアマネジメント）、山田政和さん（豊田森林組合）、  
錦二丁目まちづくり協議会メンバー、旭木の駅プロジェクトメンバー ほか

・今年も1)だけでも良いかも？

・コロナ禍で対面の会合が困難な中、10年誌編集委員が中心となって「流域圏懇談会次の10年ミライ会議」を自主的に発足（2021年8月）。今後、流域圏懇談会の活動に関しさまざまな提案を行っていく予定。主な会議の場はメイホーエンジニアリング名古屋支店。興味のある方はご一報を！